

## 茶と医薬

—忍性と梶原性全—

岩間眞知子

静岡県ふじのくに茶の都ミュージアム 客員研究員

真言律宗の僧・忍性（1217～1303）は、西大寺（奈良）を再興した叡尊（1201～1290）を師として、延応2年（1240）3月末に西大寺で出家した。のち鎌倉に遷り、極楽寺を開山する。忍性の伝記『性公大徳譜』によると、弘安6年（1283）には「疫癘、国に満ち人民卒す。和上（忍性）悲愍し、門前に集い、毎日僧徒療養を加う」と、疫病が流行した折、忍性は門前で毎日治療に専念し、弘安10年（1287）には恒常的な病屋を桑ヶ谷（鎌倉市長谷）に建立した。桑ヶ谷の療病所は、『追善文』や『元亨釈書』によると、年間の患者数2863人、一か月で239人、そのうち死者44人、治る者195人であったという。更に現存する『極楽寺伽藍図』には、療病、悲田の二院のほか、施薬・福田・病宿・癩宿・馬病屋等救済施設も描かれている。

鎌倉後期の僧医・梶原性全（1266～1337）は、日本中世最大の医書『頓医抄』と『万安方』を編纂した。『頓医抄』巻34は「癩病編」である。「癩病」は光明皇后の逸話にあるように古くから知られるが、中日医書は、従来、癩病を風病の一部門とし、『万安方』も同様に扱っている。ところが『頓医抄』は癩病を独立篇とし、癩病を「山病」、症候も「虫瘡」「白山」などと他の医書に見えない独自の呼称を用い、治療方法にも独自のものを加える。それは癩病患者の救済に力を注いだ忍性に感動した性全の苦心の成果ではないか、と服部敏良氏は指摘する。確かに性全は著作の動機を「普く人ヲ救ハント云フ志ヨリ発セリ」（巻35）とし、「慈悲ノ心ヲ以テ行ハ縦ヒソノ業拙クトモ皆効アルヘシ」（巻46）とし、『頓医抄』を和文で記した。多数の人、とりわけ癩病患者を救済したいとする性全の思いには、「弘法利生」を掲げた忍性の影響が見えよう。

次に『頓医抄』の「癩病」薬である赤龍丸や苦酒薬方などの処方にも、茶、茶木、唐茶が見える。「唐茶」は「表皮を去り搗いて篩う」とあるものの実態は未詳だが、癩病の治療に茶を用いたことは確かである。

さて永仁5年（1297）以降に作成されたとされる「西大寺敷地之図」（東京大学文学部所蔵）の西大寺西仁王門近くに「茶園」がある。「西大寺与秋篠寺界相論絵図」にも「茶園」が見え、両図の茶園は、同じものを示すようだ。後者は、西大寺と秋篠寺が寺領を巡って論争した時（正和5年・1316）に描かれたという。

この寺領をめぐる争いの折、秋篠寺の実力行使を狼藉として、西大寺が朝廷に幕府の検断を命ずるよう求めた訴状が残る。そこに「為極楽寺開山長老御沙汰、令植置処茶園并松等数百本、悉伐払、忽成荒野事」と、極楽寺の開山長老つまり忍性が指示して植えた茶園が、（秋篠寺によって）ことごとく伐り払われてしまった、とある。「西大寺敷地之図」が描かれた永仁5年（1297）までに、忍性が西大寺に茶園を作らせることは可能で、西大寺の茶園は忍性の命で作られていたのである。

では、忍性はなぜ西大寺に茶園を作ったのだろうか。茶にどんな意味を見ていたのだろうか。医療や社会事業を行った忍性の思想は、文永9年（1272）に自身で誓願した十種の大願に見える。その大願第七に「峻難に道を造り、水路に橋を互し水无き所に井を掘る、山野に菓草樹等を殖う、是れ則ち無遮平等の善根、諸経多羅これを勧む、功德大故」（原漢文）とある。道を造り、橋を架け、井戸を掘る、そうした土木事業と共に「山野に菓草樹等を植えること」は、経典や多羅（観音部の仏母）が勧めるもので、功德が大きいとある。つまり忍性は菓草樹を植えることに意義を認め、菓草樹の一つが茶であったことになる。そこで西大寺に茶を植え、茶を薬として癩病などの治療に用いた。

また鎌倉の極楽寺には、今も「極楽寺ノ井」や「製薬鉢」と共に「千服茶臼」があり、江戸時代の極楽寺境内図には大きな茶臼が描かれる。忍性は鎌倉でも困窮者・病人に茶を振舞い、癩病患者の治療に、茶を薬として用いたのであろう。